

プロ野球独立リーグの選手獲得戦略における一考察

～四国地区大学野球連盟でプレーする選手を対象に～

1200542 山本 卓磨

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. はじめに

1990年代から続く企業の業績不振や日本経済の不景気によって、盛んだった社会人野球が急速に下火となり、プロ野球（トップリーグである日本野球機構、以下NPBと略す）を目指す若者の、チャレンジの場が減少することにつながった。NPBを目指す若者や、元NPB選手を指導者として受け入れていた社会人野球の衰退は、NPBを目指す若者の進路決定や、NPB選手の指導者としてのセカンドキャリアに大きな影響を与えた。2001年に文部科学省が発表した「スポーツ振興基本計画」の中では、「近年の経済不況等による企業のスポーツチームの休廃部が相次ぐ中、競技者が企業に所属するだけでなく、企業に頼らなくても競技を続けられるような環境整備が必要である。一方、市区町村においては、地域に根差したチームの存在は、地域の活性化につながることから、地域再生という観点から、地域の実情に応じたスポーツを振興することが望ましい」と述べられている。つまり、地域創生という観点からも、競技者の受け皿になるという観点からも、企業に代わり、地域を拠点として、プロスポーツチームを運営することが求められる時代になりつつある。

2005年に元プロ野球選手である石毛宏典氏らによって、設立された「四国アイランドリーグ」（以下四国ILと略す）は、新たな地域の担い手と期待され、社会人野球に代わり彼らの受け皿となるべく開幕し、令和2年度より16年目を迎える（2011年に現在の「四国アイランドリーグplus」に改称）。四国ILを含む独立リーグは、日本野球機構（NPB）に属さないプロ野球球団のことで、一般社団法人日本独立リーグ野球機構（2014年9月に四国ILとルートインBCリーグ（以下BCリーグと略す）の両リーグの合同機構として設立された組織）が運営している。現在では、四国IL、BCリーグ、関西独立リーグと、3つのリーグがNPBを目指す若者の受け皿となっている。四国ILでは、15年間で約66名の選手をNPBに輩出し、創設時の目的であった「プロを目指す若者の受け皿となる」こと

に対しては一定の実績を残したと言える。また、独立リーグは「夢をかなえるための場所」（喜瀬, 2016）、「野球を諦めるための場所」（石原, 2015）という表現をされ、多様なキャリアを持つ選手が集まる場所だと言える。他にも、2020年春から新たに北海道と沖縄に球団が誕生するなど、社会人野球として企業が支えてきた役割を、地域が主体となる独立リーグが支え始めている。

また独立リーグは、野球におけるキャリア形成の点においても、いくつかの可能性が期待されている。一般的な野球によるキャリア形成は、子供から野球を続けることで、野球の技能を利用し、推薦で高校や大学進学を果たし、最終的には一流企業に就職、NPB選手としてキャリアをつくることである。こうしたキャリア形成のパイプは、大学野球部OBのネットワークが根付いて、社会人野球関係者や高校野球指導者に及び、そして中学生や小学生の指導者と、パイプを組むことでネットワーク化されている（竹内・高橋, 2006）。つまり裏を返せば、パイプやネットワークの乏しいチームの選手や、進学の際に推薦を取れなかった選手は、NPBを目指すうえでキャリアを形成していくことは難しい。さらに、NPB入りするためには全てドラフト指名を受けなければならない、指名対象の選手が細かく定められているため、チャンスは多いとは言えない（指名対象選手は、高校3年生、大学4年生、高卒社会人3年目以降、大卒社会人2年目以降の選手である。なおかつ、高校生、大学生はプロ志望届を提出した者のみ対象である）。しかし、独立リーグ在籍選手は入団1年目から指名対象になるため、他のカテゴリーの選手に比べて早く指名を受けることができ、新たな可能性が期待されている。

しかし、独立リーグの役割として定義されている「人材育成」「地域貢献・地域活性化」「スポーツ界の裾野拡大」については、各球団の財政基盤が安定しておらず、まだ道半ばであることが否めない。独立リーグの価値が選手に十分に認められていないことが考えられる。実際に筆者自身も当初は、

大学卒業後も社会人野球チームでプレーを続けたいと考えていたが、本人の実力不足や、大学野球部の歴史の浅さゆえの野球界におけるパイプの少なさによって、卒業後もプレーできる環境を掴むことはできなかった。大学4年の6月に出場した全国大会後も、企業チームから声がかかることはなく、野球を続けることを諦めていた。筆者自身、野球を続けたくても続けることができないというジレンマを抱えていたのだ。社会人野球に代わり、地域の受け皿となるべく設立された独立リーグだが、筆者自身は独立リーグに進むことは、頭の片隅にもなかった。筆者と同様に、独立リーグという選択肢を敬遠し、野球を諦めている選手が存在するのではないかと考えられる。その点において、独立リーグが地域において、受け皿として本当に機能しているのか疑問に感じるようになった。さらに、大学卒業後の野球継続におけるジレンマを抱えた選手は、今後も必ず存在することが考えられる。

本研究では、四国地区大学野球連盟に所属する選手に、大学卒業後の野球継続意志に関する調査を行う。また、四国ILに対しての評価も合わせて調査することで、独立リーグが地域において受け皿となっているのかを明らかにしていく。本研究によって、野球を続けたくても続けられないといったジレンマを抱えながらも、独立リーグを敬遠し野球を辞めていく選手を減らすことにもつながることを期待したい。

2. 目的

本研究では、四国地区大学野球連盟に所属する大学生に焦点を当て、卒業後も野球を継続したいのか、またどのカテゴリーで継続することを希望しているのか、さらに四国ILが彼らの「目指すべき場所」として期待されているのか、また彼らが四国ILに対してどのような印象を持っているのかを明らかにすることで、今後の四国IL各球団の選手獲得に対するアプローチを考察していく。

3. 研究方法

3-1 ヒアリング調査

本研究では、四国地区大学野球連盟から2019年に四国ILに入団した選手2名(A、B)に、入団までの経緯や心境の変化を明らかにするため、ヒアリング調査を実施した。質問項目は以下の通りである。

- ・入団のルート
- ・初めから独立リーグを目指していたのか
- ・独立リーグでプレーする理由は何なのか
- ・ほかの選択肢は考えなかったのか(野球を辞めて就職する、独立リーグ以外でプレーするなど)
- ・野球を辞めた後のことは考えているか

3-2 質問紙調査

質問紙調査では、四国内の大学で野球をする大学生を対象に、大学卒業後も野球を継続したいと考えているのか、四国ILに対してどのような印象を持っているのかを調査した。

調査は、2019年四国地区大学野球連盟秋季リーグ戦において1部に在籍している6大学を対象に行い、調査期間は2019年11月12日～11月22日であった。尚、1～3回生は質問紙での調査、4回生にはgoogle フォームを用いたweb調査を実施した。有効回答は、127部であった。

4. 結果

4-1 ヒアリング調査

4-1-1 選手A

まず、入団のルートは、大学OBのパイプを利用し、独立リーグ球団関係者に試合を視察に来てもらい、その際に目に留まり、スカウトされた。最初から独立リーグを希望していたのではなく、社会人野球を希望していたが、「プロ野球選手になりたい」という夢を最短で叶えるため、入団一年目からドラフト指名対象である独立リーグを選択した。当初希望していた社会人野球からもいくつか誘いがあったが、プロを意識できるほどの強豪チームからの誘いではなかったため、独立リーグを選択した。野球を辞めて就職するという考えは初めからなかった。野球を辞めた後のことは、現段階では考えられず、一日でも早くNPBに行けるように取り組んでいる。

4-1-2 選手B

まず、入団のルートは、所属大学と独立リーグのOP戦を球団関係者が視察に訪れており、その試合で目に留まり、スカウトされた。最初から独立リーグを希望していたのではなく、プロ野球選手を目指していたが、NPB球団から調査書が届かなかったため、レベルも高く、入団一年目からドラフト指名

対象である独立リーグを選択した。声をかけてくれていた社会人野球や、野球を辞めて就職することも考えたが、応援してくれる人の存在や、自分自身の幼いころからの夢を叶えるため、野球を続けることを決意し、独立リーグを選択した。選手 B も A と同様に、野球を辞めた後のことは、現段階では考えられず、一日でも早く NPB に行けるように取り組んでいる。

4-1-3 選手 A、B に対するヒアリング結果のまとめ

両選手共、初めから独立リーグを希望していたわけではないことが分かった。しかし、将来プロ野球選手になりたいと考える中で、最も早く NPB からの指名を受けることができる独立リーグを選択していた(独立リーグは入団一年目からドラフト対象)。入団の際に、他の選択肢は考えなかったかという質問に対しては、選手 B は、野球を辞めて就職しようかと考えた時期もあると答え、迷いの中での決断だったことがうかがえた。選手 A、B 共通して、野球を辞めた後のことは考えられず、今は NPB 入りするために日々全力で取り組んでいる。入団のルートも共通で、球団関係者から声をかけてもらったというルートであった。

4-2-1 質問紙調査(個人的属性)

これより、個人的属性項目の結果について述べる。

① 性別・年齢・出身地

四国地区大学野球連盟では選手として活動している女子が 2 名含まれている(表 1)。また、年齢は大学 1 年～3 年までの現役選手から回答を集め、最も多かったのは 20 歳だった(表 2)。また選手の出身地は、四国出身と四国外出身でほぼ半々であった(表 3)。

表 1. 性別

項目	度数	%
男性	125	98.4
女性	2	1.6
合計	127	100

表 2. 年齢

項目	度数	%
18歳	9	7.5
19歳	33	25.9
20歳	40	31.4
21歳	32	25.1
22歳	12	9.4
23歳	1	0.7
合計	127	100

表 3. 出身地

項目	度数	%
四国内	60	47.2
四国外	67	52.8
合計	127	100

② ポジション・野球歴

ポジションは、内野手が最も多く、次いで外野手、投手という順で、捕手がやや少なかった(表 4)。野球歴は、約 70% が 11 年以上野球を続けており、小学生で野球を始めた選手がほとんどだった(表 5)。

表 4. ポジション

項目	度数	%
投手	34	26.7
捕手	13	10.2
内野手	44	34.6
外野手	36	28.5
合計	127	100

表 5. 野球歴

項目	度数	%
11年以上	90	70.8
11年未満	37	29.2
合計	127	100

③ 大学卒業後も野球を続けたいか・どのカテゴリーで続けたいか

「野球を続けたい」と考えている選手が最も多く(44%)、「まだわからない」と答えた選手の中にも大学での成績や、自分の成長次第では続けたいと回答するなど、前向きな回答が比較的多かった(表 6)。

また、カテゴリーについては社会人野球の約 40%、次いで草野球の約 37%で、独立リーグを希望している選手は合わせて約 4%と非常に少なく、海外を希望している選手のほうが多かった(表 7)。

表 6. 大学卒業後野球を続けるか

項目	度数	%
はい	56	44
いいえ	43	33.9
まだわからない	28	22.1
合計	127	100

表 7. どのカテゴリーで続けたいか

項目	度数	%
NPB	7	11.9
社会人野球	24	40.7
四国アイランドリーグplus	1	1.7
その他独立リーグ	1	1.7
草野球	22	37.3
海外	4	6.8
合計	59	100.0

※無回答を除く

4-2-2 アンケート調査(四国 IL に対する評価)

① 全体

四国 IL に対する評価では、四国地区大学野球連盟所属大学現役選手は、「応援したい」「大学野球よりもレベルが高い」がほかの項目に比べ平均値が特に高かった。一方で、「良い印象を持っているか」という項目の平均値は約 3.00 点と、特別良い印象を抱いていることはなかった。さらに「プレーしたいか」という項目は、平均値が 2.36 点と 7 項目中最も低く、四国 IL は、彼らにとって目指す場所になっていないことが分かった(表 8)。

表 8. 四国 IL に対する評価と平均値、標準偏差

項目	平均	標準偏差
良い印象を持っている	2.99	1.10
尊敬できる存在である	3.09	1.09
活動を応援したい	3.37	1.18
高いクオリティの試合を提供している	3.09	0.96
地域社会において素晴らしいリーダーシップを発揮している	2.87	1.04
大学野球よりもレベルが高いと感じる	3.57	1.03
プレーしたいと思う	2.36	1.16

さらにこれらの質問に関して、出身地別、大学卒業後の野球継続意志別に比較を行った。

② 出身地別比較

質問 1 (印象) に関して出身地別に平均値の比較を行った結果、四国内の出身者より、四国外の出身者の方が良い印象を持っていることが、有意に認められた。(表 9)

表 9. 出身地別、四国 IL に対する評価と平均値、標準偏差、t 値

項目	四国内 n=60		四国外 n=67		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
良い印象を持っている	2.73	1.07	3.22	1.07	-2.58 *
尊敬できる存在である	2.90	1.04	3.25	1.12	-1.84
活動を応援したい	3.22	1.15	3.51	1.20	-1.39
高いクオリティの試合を提供している	3.08	1.01	3.09	0.92	-0.04
地域社会において素晴らしい、 リーダーシップを発揮している	2.77	1.02	2.97	1.06	-1.10
大学野球よりもレベルが高いと感じる	3.60	1.03	3.54	1.04	0.34
プレーしたいと思う	2.40	1.21	2.33	1.12	0.35

*p < .05.

③ 卒業後の野球継続意志別比較

次に、それぞれの質問に対して、野球継続意志の有無別に平均値の比較を行った結果、質問 1 (印象) に関して、いいえと回答した人より、はいと回答した人の方が良い印象を持っていることが、有意に認められた。

質問 2(尊敬)に関して、いいえと回答した人より、はいと回答した人の方がより尊敬していることが、有意に認められた。さらに、質問 2(尊敬)に関して、いいえと回答した人より、まだわからないと回答した人の方がより尊敬していることが、有意に認められた。

質問 7(プレーしたいか)に関して、いいえと回答した人より、はいと回答した人の方がよりプレーしたいと感じていることが、有意に認められた。また、いいえと回答した人より、まだわからないと回答した人の方がよりプレーしたいと感じていることも、有意に認められた。

表 10. 卒業後も野球を続けたいか回答別、四国 IL に対する評価と平均値、標準偏差、F 値、多重比較

項目	はい n=56		いいえ n=43		まだわからない n=28		F 値	多重比較
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
良い印象を持っている	3.25	0.14	2.58	0.16	3.07	0.20	4.94 **	はい>いいえ **
尊敬できる存在である	3.27	0.14	2.7	0.16	3.33	0.21	4.39 *	はい>いいえ *
活動を応援したい	3.48	0.16	3.12	0.18	3.56	0.23	1.58	いいえ<まだわからない*
高いクオリティの試合を提供している	3.18	0.13	2.93	0.15	3.11	0.19	0.83	
地域社会において素晴らしい、 リーダーシップを発揮している	3.31	0.14	2.65	0.16	2.89	0.20	1.68	
大学野球よりもレベルが高いと感じる	3.62	0.14	3.51	0.16	3.56	0.20	0.15	
プレーしたいと思う	2.59	0.14	1.74	0.16	2.89	0.21	11.57 **	はい>いいえ ** いいえ<まだわからない

*p < .05, **p < .001.

5. まとめ・考察

四国 IL への入団のルートは、球団スカウトなど球団関係者に声をかけてもらうパターンと、合同トライアウトを受験

するパターンがある。今回ヒアリング調査対象であった2名の選手は、球団関係者から声をかけてもらったパターンであった。つまり、球団関係者に試合を見に来てもらい、そこで目に留まらなければならない。試合を見に来てもらう実力や、見に来てもらった試合で活躍できる運が必要になる。実力や運が足りず、声をかけてもらうことができなかった選手は、合同トライアウトを受験することが、入団の近道であると言える。しかし、トライアウトの開催時期は、11月と翌年2月ごろで、進路決定のタイミングとしては比較的遅く、他の選択肢も考える選手にとっては、相当な覚悟が必要で、自分の可能性を試したいとチャレンジするには難しい時期となっている。選手の給与が特に高くなく、厳しい環境でプレーすることで敬遠されがちな独立リーグが、リスクの高いこの時期にトライアウトを開催しているのは、野球を続けたいと考えている選手にも敬遠される、更なる原因になっているのではないだろうか。

またアンケート調査の結果から、四国ILに対する評価は、応援したいレベルも高いと感じてはいるものの、プレーしたい場所ではないというものであった。現役選手たちの多くは、自分が通用するような実力が身に付けば、できる限り高いレベルで長く野球を続けたいと考えていることが分かった。一方で、回答者の大部分が長年野球に取り組んできたことから、中には野球以外の事をしてみたいと回答した選手もいた。野球を続けたいと回答した選手の半数近くは社会人野球に進みたいと考えており、働き給与を受け取りながらもNPBに挑戦でき、高いレベルで野球を続けられることに魅力を感じていた。しかし四国IL、BCリーグを含む独立リーグでプレーしたいと回答したのは、全体で約2名と非常に少なく、独立リーグは野球を続けたい選手からも敬遠されているようであった。

筆者自身は四国ILの合同トライアウトを受験し、合格した。入団決定後に後輩たちから独立リーグについて多くの質問を受けた。しかし、彼らは興味を持っているものの、入団のルートさえ知らなかった。これは、プロアマ規定により大学と独立リーグの交流が少なく、理解が進んでいないことが原因だと考えられる。

プロアマ規定とは、プロ野球球団や選手(独立リーグも含む)とアマチュアの選手や学生(中高生、大学生)との接触に制

限を課したもので、プロ選手がアマチュア選手に指導することなどが主に禁止されている。プロ野球選手の息子が高校生や大学生だった場合、自分の子供に指導するのさえ禁じられている。このように厳しくプロアマの接触が禁止されている。

今後は、最優先にプロアマ規定を見直し独立リーグの理解を野球界全体で進めていかなければならない。プロアマ規定などの規定内では、独立リーグ選手はNPB選手と同様にプロ野球選手として扱われているが、ドラフト指名を受けなければ独立リーグ選手はNPB入りすることができず、その点はアマチュア選手と同様の扱いになっている。ここに矛盾が生じている。トライアウトの開催時期も早め、選手にチャレンジしやすいものにしていくべきで、今の開催時期になっているのもプロアマ規定が関係している。

そこで私は、プロアマ規定をNPB選手と独立リーグ選手で分けてはどうかと考える。NPB選手には従来通りのプロアマ規定を使用し、独立リーグ選手には、少し緩めたプロアマ規定を実施してはどうかと考える。独立リーグに在籍する元NPB選手にも、独立リーグ選手のプロアマ規定でよいことにする。独立リーグは、NPBと資金力も設備も異なるため、より地域に密着することが必要であり、NPBと同じプロアマ規定で縛られているのは不利である。これが実現されれば、独立リーグ選手との交流の増加から、大学生のモチベーションやレベルの向上も期待できる。さらに、独立リーグに対する地域や大学生、高校生らの理解が深まれば、自ずと独立リーグでのプレーを希望する選手も増加し、地域内における独立リーグのブランド価値を高めることにもつながると考える。

そして、今後の四国IL各球団の選手獲得に対するアプローチとしては、地元出身選手や、地元大学出身選手による高校生や大学生への講演会など、会話をする機会を設けることが望ましいと考えられる。学生も、高いレベルでプレーしたいと望む選手だけを集めて行うことが望ましい。今回の質問紙調査でも、野球を継続したいと希望している選手のほうが、四国ILに対しての評価が良く、興味を持っていることが明らかになった。さらに出身地別比較では、四国内出身者よりも、四国外出身者の評価が良かったため、独立リーグの存在しない地域の出身者などが興味を持っていることが考えられる。筆者自身も、本研究のヒアリング調査対象であった2名の選手に話を聞いたことが、その後の四国ILトライアウト受験の

きっかけになり、独立リーグに進むことにつながった。数年前まで身近にプレーしていた選手の話すことは、球団関係者が説明するよりも、説得力があるように感じられ、学生にとっても進路決定に影響すると考えられる。各球団は地元出身者や、地元大学出身選手を活かし、地域や学生に独立リーグの価値を認めてもらえるよう、日々取り組むことが重要である。

6. 今後の課題

本研究では独立リーグの存在する地域でプレーする四国の大学生に焦点を当て研究を実施した。四国の大学野球のレベルは全国的に見れば低く、独立リーグに進む選手を輩出するには少々難しいのかもしれない。また質問紙調査内で、四国ILに対する評価は、四国内出身者よりも四国外出身者のほうが良い印象を持っていたことから、今後は、独立リーグの存在しない地域の大学リーグで同調査を行い、本研究との相違点について比較・検証する必要がある。また、BCリーグの存在する関東・北信越の大学野球リーグでも同調査を行い、比較・検証する必要もある。

最後に本研究を進めるにあたり、ヒアリング調査にご協力頂いた四国IL在籍の2名の選手、質問紙調査にご協力いただいた四国地区大学野球連盟各大学選手の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げたい。

引用文献

- [1] 竹内一郎・高橋義雄：高校生球児の野球留学とキャリア形成の諸課題,2006
- [2] 宮寺匡広：NPB 以外の選択肢 逆境に生きる野球人たち,2017,彩流社
- [3] 村山哲二：もしあなたがプロ野球を創れと言われたら「昇進」より「夢」を選んだサラリーマン,2011,ベースボールマガジン社
- [4] <http://www.iblj.co.jp/league/> 四国アイランドリーグplus ホームページ
- [5] <http://www.bc-l.jp/league-info/league> ルートイン BC リーグ ホームページ
- [6] http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm 文部科学省 HP,スポーツ振興基本計画,我が国の国際競技力の総合的な向上方策 A,(4)競技者が安心して競技に専念できる環境の整備,スポーツ基本法
- [7] 石原豊一：もうひとつのプロ野球,2015,白水社
- [8] 喜瀬雅則：牛を飼う球団,2016,小学館
- [9] 石毛宏典：石毛宏典の独立リーグ奮闘記,2009,アトラス出版
- [10] チームアイデンティティ構築におけるチーム・レピュテーションとセンス・オブ・コミュニティの影響-J2 リーグ所属サッカークラブサポーターの事例-.2014,富山浩三
- [11] https://www.jubf.net/doc/kitei_pro_college.html 全日本大学野球連盟ホームページ
- [12] 日本におけるプロ野球マイナーリーグの持続的モデル構築に向けて-野球ビジネスの日米比較から-,2010,石原豊一
- [13] 現代社会における若者の現実逃避的行動についての考察-「自分探し」の延長線上のプロアスリート-2011,石原豊一
- [14] <http://www.ipbl-japan.com/> 一般社団法人日本独立リーグ野球機構ホームページ

